## 酒梨の子育て地蔵尊（市島町）

保月〈ほげつ〉城（春日〈かすが〉町黒井）が落城〈らくじょう〉した天正〈てんしょう〉七年（一五七九年）の丹波地方は、ひでりで、米の収穫がよくなかったと、伝えられています。

保月城の家老〈かろう〉であった荻野丹後〈おぎのたんご〉は、その年に生まれた子どもと、妻をつれて、美和庄乙河内〈みわのしょうおとがわち〉（市島町）にのがれ、知りあいの農民の家に、かくれてくらしていました。そのうちに、妻の乳の出がわるくなって、子どもは、元気がなくなり、日に日にやせ細っていきました。
「この子のゆくすえを考えて、農民になる決心をしたのに―。」
荻野丹後は、保月城主〈じょうしゅ〉の赤井直政〈あかいなおまさ〉から、その名の一字をあたえられて、荻野直国〈おぎのなおくに〉と名のることをゆるされていたほどの武将でしたので、たくさんの兵士を討死〈うちじに〉させていましたが、いままた、子どもを亡くしては、なんのために生きのびているのか、わからなくなるように思いました。子どもや、妻とともに、りっぱな農民になって、討死した兵士の家ぞくのくらしをたすけることも、できなくなると思いました。

「そうだ、酒梨〈さなせ〉の地蔵さまに、おたのみしよう。」
丹後は、仏教をふかく信仰していた人だったようです。美和庄の酒梨〈さなせ〉に、農民たちの信仰のあつい地蔵尊があることを、思いだしました。
その日、荻野夫妻は、身をきよめ、乳のみ子をつれて、地蔵尊のこもり堂〈こもりどう〉へ入りました。

「南無地蔵大菩薩〈なむぢぞうだいぼさつ〉、わたくしたちは、きょうより三、七、二十一日間の祈願〈きがん〉をこめて、ここにおこもりいたします。なにとぞ、わたしたち親子にお慈悲〈じひ〉をたれたまえ、ご加護〈かご〉をたれたまえ。」一心に祈り、丹後は、法華経〈ほけきょう〉の写経〈しゃきょう〉（経文〈きょうもん〉をかき写すこと）をつづけました。
お経をとなえる夫婦の声が、こもり堂の中から、たえず聞こえていたことでしょう。夫婦のことを伝えきいて、もって来た食べものを、お堂の戸口に、そっとおいていく農民もあったのにちがいありません。お堂のそばに、大きないちょうの樹〈き〉がそびえていて、なん本かの太い根を、幹〈みき〉の中ほどから地中へおろしていました。

二十一日めの、ま夜中、荻野夫妻は、眼のまえに立った地蔵菩薩〈ぢぞうぼさつ〉の姿を見ました。ひれ伏した〈ふした〉ふたりに、菩薩の声がおちてきました。
「乳をさずけよう。いちょうのふと根をけずり、もち帰って煎じる〈せんじる〉がよい。」
そのとおりにして飲んだ妻は、乳の出があふれるばかりになって、子どもはすくすくと育ったと、いい伝えられています。
この、酒梨の地蔵尊は、いまも、子育て地蔵さまとよばれ、多くの人たちから信仰されています。また、乙河内〈おとがわち〉の勘太次〈かんたじ〉という地には、荻野丹後が、法華経二千部を写経しておさめたという経墓〈きょうばか〉が、のこっています。